

A VI部

複文(4) 実体修飾法(1)

A VI部では実体(名詞)の第1修飾法について考える。(この部の中はいくつかの章に分けたいところであるが、部立て確定後の記述となったためにそれができなかった。特にA16.5は独立させたいところである。)

A16章では、第1修飾法(いわゆる連体形での名詞修飾法)を扱う。

A16.1では、実体修飾法に4種類あることを確認する。

A16.2では、実体修飾は何のために行われるのかを述べる。

A16.3では、実体修飾関係の用語を定義する。

A16.4では、修飾構造のみを扱い、主(文)構造を扱わないことを述べる。

A16.5では、実体修飾のありうる形式を分類し、考察する。

自属性による修飾，他属性による修飾，包含実体の修飾，
基準点と関係のある修飾，に分類する。

A16.6では、「電車の走る音」「走る電車の音」の関係について述べる。

A16.7では、被修飾がカラ・マデ・ト(共同)格にある場合について述べる。

A16章

第1修飾法

A16.1 実体修飾法

1) 4種類の実体修飾法

実体(名詞)を修飾する方法には、大別して属性(動属性、形容属性等)による修飾法と、実体(名詞)による修飾法の2種類がある。

属性による修飾法にはさらに実体修飾描写詞 $-(r)u$ / $-i$ による修飾法と、 $-(i)$ / $-u$ による修飾法の2種類があり、また、実体による修飾法にも実体つなぎ描写詞「の」による修飾法と「+」^{*1}による修飾法の2種類がある。したがって、合計4種類の実体修飾法がある。それぞれに第1修飾法～第4修飾法の名称を与えることにする(表A16-1)。

4種類の実体修飾法

表A16-1

名 称	属性による修飾法		実体による 修飾法
	動属性による	形容属性による	
第1修飾法	$-(r)u$	$-i$	
第2修飾法	$-(i)$	$-u$	
第3修飾法			の
第4修飾法			+

*1 「登山道」と「入口」を「の」でつなげば「登山道の入口」となり、「+」でつなげば「登山道+入口」(「登山道入口」)となる。「+」は「の」同様、構造的に(論理的に)関係のある2実体を結んで描写する機能を持つ。しかし、音形式はない。「プラス」と呼ぶ。「音形式を持たない実体つなぎ描写詞」である。

2) 第1修飾法と第2修飾法

属性による実体修飾法には2種類ある。

例えば、図A16-1のような構造があるとき、この構造は基本的に

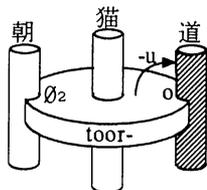
A16-1> 猫が朝 \emptyset_2 道を通る。

のように描写できる。

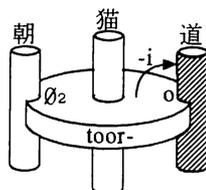
この構造において動詞(toor-)で実体(名詞、道)を修飾する場合、ふつう
toor-u 道(通る道)

のように動詞に実体修飾描写詞 -(r)u を付けて修飾することが行われる(いわゆる連体形による修飾)。この方法を「(実体)第1修飾法」と呼ぶ。(形容詞の場合の第1修飾法では、-i が実体修飾描写詞である。tika.k-i 道)

第1修飾法



第2修飾法



図A16-1 toor-u 道(通る道)

図A16-2 toor-i 道(通り道)

これに対して、次のような、動詞(toor-)に実体修飾描写詞 -(i) を付ける形での修飾法もある(いわゆる連用形による修飾)。

toor-i 道(通り道)

このような修飾法を「(実体)第2修飾法」と呼ぶ(図A16-2)。(形容詞の場合の第2修飾法は限られた用法しかないが、-u が実体修飾描写詞である。tika.k-u ø包)

本章では動詞を中心に、(実体)第1修飾法を扱う。第2～第4修飾法については『日本語構造伝達文法 発展B』で扱う予定である。(A17.2 ⑬～⑯も参照されたい。「の」については『文法』第XⅡ部ですでに扱っている。『発展B』では、「の」のさらに考察すべき事項について扱う予定である。)

A16.2 実体修飾は何のために

1) 実体が属性と格関係にある場合

実体が属性と格関係にあるということは実体が属性と論理関係を持っていることを意味している(『文法』第2章)。

図A16-3のような構造がある。この構造は基本描写法で次のように描写することができる。

A16-2> 彼が会議で原稿を読む。

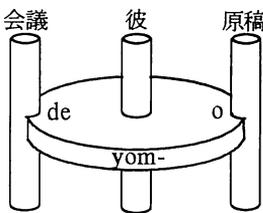
しかし、もし実体「原稿」が図A16-4のように別の構造の中でその構造中の属性(kak-)に対してある格(を格)に立っている場合、この2つの構造の全体を表現しようとするときは、図A16-3の構造を上記のA16-2>の基本描写法で描写するのは不適切で、その場合には、

A16-3> 彼が会議で yom-u 原稿 \$

のように、属性を修飾(矢印で図示)という形で処理し、実体がどんな格でも(記号\$で表す)取れるようにしなければならない。実体「原稿」の格が自由(\$)になっていれば、別の構造に従って「を格」で描写することができ、

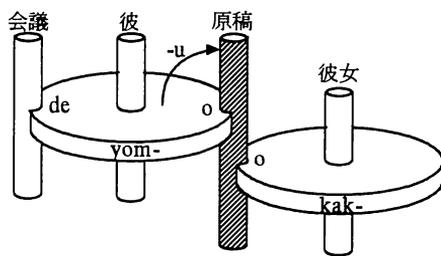
A16-4> 彼が会議で yom-u 原稿 を 彼女が書く

とすることができ、全構造を描写することが可能となる。



図A16-3

彼が会議で原稿を読む



図A16-4 彼が会議で読む原稿を彼女が書く

ここでは「実体修飾」というものは、修飾が行われる構造の属性(yom-)と格関係(o)にある実体(原稿)に構造の情報(彼が会議でyom-)を付与したうえで、その実体を別の構造(彼女がkak-)中の何らかの格に立てることができるようにするために、その実体の格を自由にする(o→\$)手続きとなっている。

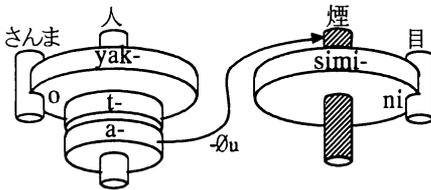
2) 実体が属性と格関係にない場合

図A16-5 のような修飾関係がある。これは

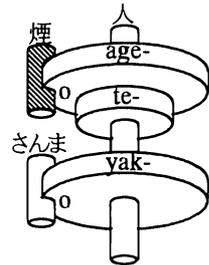
A16-5> さんまを焼いた煙が目にしみる。

という文の構造である。

この構造では修飾される実体(煙)は修飾する属性(焼いた)と格の関係にない。しかし、話者・聞き手は例えば 図A16-6 のような構造で、実体(煙)と属性(yak-)の論理関係を容易に把握することができる。したがって、格の関係にはなくとも論理関係は認識することができる。(これに対し「さんまを焼いたピン」のような例では実体<ピン>と属性<焼いた>の論理関係を把握することはできず、論理関係にあるものとはとらえられない。)



さんまを焼いた煙が目にしみる
図A16-5 修飾構造 + 主構造



煙を上げてさんまを焼く
図A16-6

日本語では、実体(煙)と属性(焼いた)が直接の格の関係にはなくとも、話者によって論理関係があると認められる場合には修飾関係が成立する。

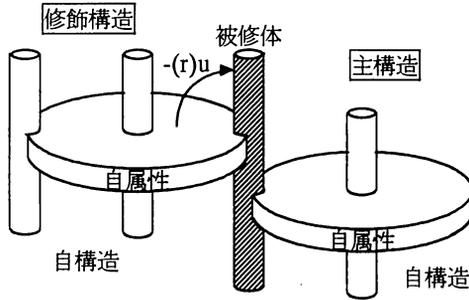
図A16-5 のような構造の場合、被修飾実体(煙)はもともと修飾属性(焼いた)から独立しているので、格を自由(\$)にする必要はない。このとき実体修飾をするのは修飾構造の情報を付与するためだけである。

以上、1)、2)から実体修飾を次のように定義することができる。

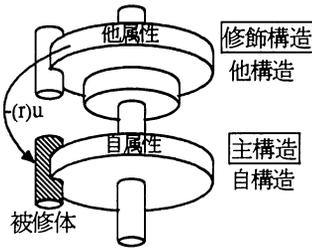
実体修飾とは、修飾構造と構造的に(論理的に)関係のある実体を、修飾構造の情報を付与しつつ主構造中に立てる(ことができるようにその実体の格を自由にする)ための手続きである。

A16.3 用語の定義

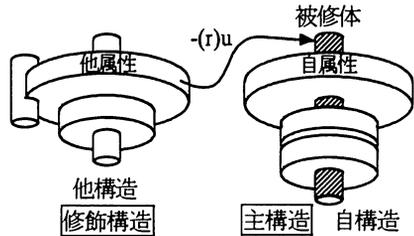
ここで、この章で使用されるいくつかの用語について定義しておきたい。



図A16-7 修飾構造・主構造の両方が自構造



図A16-8 修飾構造が他構造
(同一主体)



図A16-9 修飾構造が他構造
(異主体)

- ① 被修体……「被修飾実体」の略で「修飾される・された実体」のこと。
複数個ある場合は「被修体1・被修体2」のようにする。
斜線を施して図示する。「被修飾実詞」は被修詞とする。
- ② 修飾構造……修飾属性(被修体を修飾する属性)を持つ単位構造。被修体を格保持(格関係で保持)していて、単位構造内で修飾関係が実現している場合もある。他の単位構造と共に修飾構造群となることもある。
- ③ 被修構造……修飾構造の修飾属性により修飾された被修体が何らかの格に立つ、修飾構造とは別の構造。③も参照。

- ㉔ 主構造……………修飾構造にならない被修構造。主文として描写される構造。主構造の持つ属性を主属性とする。
- ㉕ 自構造……………被修体が格関係で関わっている単位構造。
- ㉖ 他構造……………被修体が格関係で関わっていない単位構造。被修体を修飾する場合は「自構造」と「論理関係」(㉑)を持つ。
- ㉗ 自属性……………被修体が格関係で関わる属性。
- ㉘ 他属性……………被修体が格関係で関わっていない属性。
- ㉑ 論理関係………構造の属性に「て」が付いたり、構造が並置されたりして、複数の単位構造間に生ずる(時間的先後関係等を含む)論理関係。話者と聞き手の共有する常識で理解できるもの。

論理関係の例

例1) おふろに入る^{タオル} ←おふろに入って、^{タオル}を使う。(図A16-27)

例2) さんまを焼く^煙 ←^煙を上げて、さんまを焼く。(図A16-36)

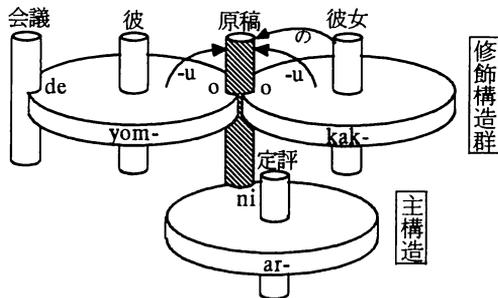
次の例は話者と聞き手の認識状況に応じて「論理関係」にある場合もある。

例3) さんまを焼く^{下駄} ←^{下駄}を履いて、さんまを焼く。

次の例はふつう「論理関係」にない。

例4) さんまを焼く^{ビン} ← _____[?] _____ (常識的論理関係不明)

- ㉒ 多重修飾……「彼が会議で読む、彼女の書く 原稿 には定評がある。」
のように、1実体(原稿)が複数の単位構造による修飾を受けること。
修飾構造は単位構造群となる。

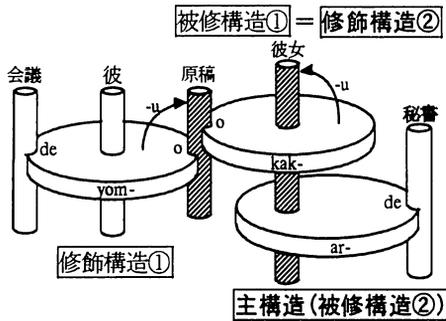


図A16-10 彼が会議で読む、彼女の書く原稿には定評がある

- ④ **被修連鎖**……A16-6> のように被修構造の属性が新たに実体を修飾する場合、その被修構造を第2の修飾構造とみなすことにし、修飾構造②のように表示する。これにより修飾される被修構造は被修構造②のように表示する。修飾構造・被修構造のセットは②③④…と増えていく。これを被修連鎖という。

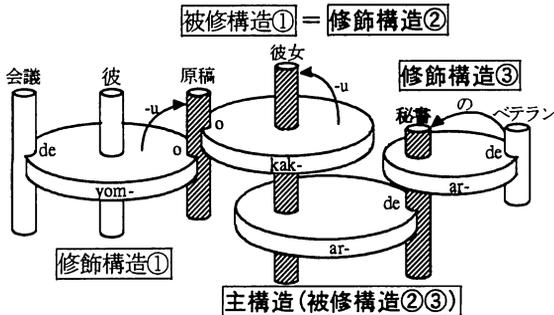
A16-6> 彼が会議で読む 原稿を 書く 彼女は 秘書だ。

修飾構造① 被修構造①=修飾構造② 主構造(被修構造②)



図A16-11 彼が会議で読む原稿を書く彼女は秘書だ

- ① もどり修飾……被修連鎖のうち被修構造の属性が修飾構造内の実体を修飾するもの(A16.5<32>参照)。(普通の修飾は「進み修飾」)
- ㉓ 複数被修体の格保持……1属性が複数の被修体を格関係で保持すること。(下図の主構造は2つの被修体を格保持している。)

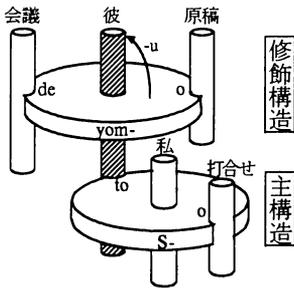


図A16-12 彼が会議で読む原稿を書く彼女はベテランの秘書だ

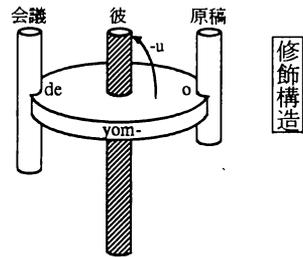
A16.4 実体修飾は修飾構造による……本章では修飾構造を扱う

実体修飾は修飾構造内の属性によって行われるので、本章では基本的に修飾構造のみを扱う。修飾された実体が主構造(被修構造)において何格になるのかは、本章では問題としない。

図A16-13 では構造を全部読むと「私₀₁は会議で原稿を読む彼と打合せをする」となるが、本章では基本的に主構造をはずし、図A16-14 (会議で原稿を読む彼)のような形で修飾構造のみを扱う。



図A16-13 私₀₁は会議で原稿を読む彼と打合せをする



図A16-14 会議で原稿を読む彼

A16.5 実体修飾のありうる形式

この節では、属性による実体修飾のありうる形式について検討する。次のような順序で考えていく。(この A16.5節は<10>から<62>までの10以上の部分から成る。これだけで1つの章としたいところである。)

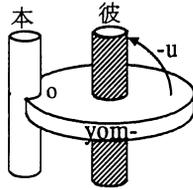
- <10> 自属性による修飾 <11><12>
- <20> 他属性による修飾(1) 自属性による修飾のない場合
 <21><22><23><24>
- <30> 他属性による修飾(2) 自属性による修飾もある場合 <31><32>
- <40> 包含実体が修飾される場合(1) 機能的包含実体 <41><42>
- <50> 包含実体が修飾される場合(2) 意味的包含実体 <51>
- <60> 基準点と関係のある修飾……ヨリ格の関わる構造 <61><62>

A16.5 <10> 自属性による修飾

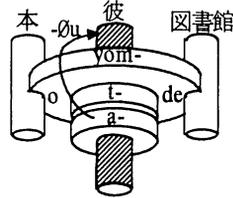
自属性による修飾の場合を、自属性が主体を修飾する場合<11>と、自属性が客体を修飾する場合<12>との2つに分けて扱う。

A16.5 <11> 自属性が主体を修飾する場合 (主体が被修体)

図A16-15、-16 はごく基本的な修飾の形である。それぞれが自属性の主体を修飾しており、「本をyom-u彼」「図書館で本をyom-i=t-θ=a-θu(読んだ)彼」のようになる。



図A16-15 本をyom-u彼

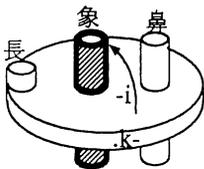


図A16-16 図書館で本を読んだ彼
(yom-i=t-θ=a-θu)

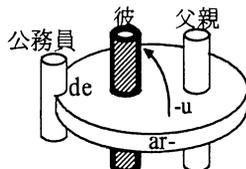
図A16-17~-19 は複主体構造で、本主体(太線で表示)が単位構造を属性としている場合である(『文法』第19章)。単位構造を属性としていることから、属性主体を含む文の形式で本主体を修飾することができる。

「鼻が長.k-i(長い)象」「父親が公務員でar-u彼」「長男が結婚su-ru田中さん」

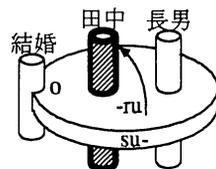
のようになる。もちろん、「の」を使用して「長男の結婚su-ru田中さん」のように属性主体(長男)を本主体(田中さん)と結んだ形の描写にしてもよい。



図A16-17
鼻が長い象



図A16-18
父親が公務員である彼

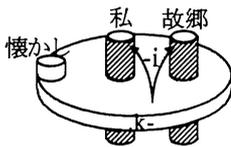


図A16-19
長男が結婚する田中さん

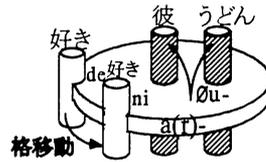
もし、属性主体のほうを修飾する場合は、本主体に「の」をつけて属性主体と結び、属性に属性主体を修飾させ、「象の長.k-i(長い)鼻」「彼の公務員でar-u父親」「田中さんの結婚su-ru長男」のようにする。(『文法』19.3 [特徴3])

図A16-20, -21も複主体構造で、感覚主体と帯感主体の2主体がある(『文法』20.2)。感覚主体を修飾すれば「故郷が懐かし.k-i私」「うどんが好き-de=ar-u彼」「うどんが好き-n=a-0u彼」となり、帯感主体を修飾すれば「私が懐かし.k-i故郷」「彼が好き-de=ar-uうどん」「彼が好き-n=a-0uうどん」となる。

「の」を使って両主体を結んで「故郷の懐かしい私」「彼の好きなうどん」のように描写してもよい。(形としては「が」を「の」に換えたことになる。)

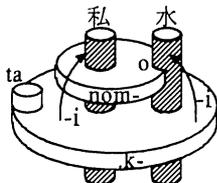


図A16-20 故郷が懐かしい私
故郷の懐かしい私
私の懐かしい故郷



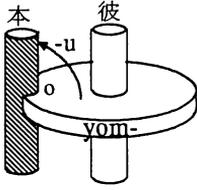
図A16-21 うどんが好きである彼
うどんが好きなの彼
彼が好きなのうどん

図A16-22 は上置き構造を伴う構造(『文法』21.2)で、やはり複主体構造である。感覚主体(私)を修飾すれば「水が飲みた.k-i私」になり、帯感主体(水)を修飾すれば「私が飲みた.k-i水」になる。「の」を用いて「水の飲みたい私」「私の飲みたい水」のように主体結びをしてもよい。(形としては「が」を「の」に換えたことになる。)

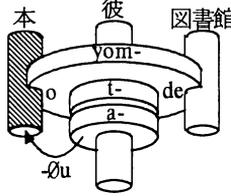


図A16-22
水が飲みたい私(水の飲みたい私)
私が飲みたい水(私の飲みたい水)

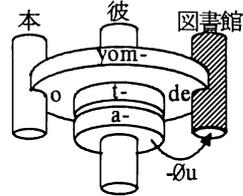
A16.5 <12> 自属性が客体を修飾する場合 (客体が被修体)



図A16-23
彼が yom-u 本



図A16-24
彼が図書館で読んだ本



図A16-25
彼が本を読んだ図書館

図A16-23～-25 はごく基本的な構造である。それぞれにおいて自属性が客体を修飾しているので「彼が yom-u 本」「彼が図書館で yom-i=t-Ø=a-Øu (読んだ) 本」「彼が本を yom-i=t-Ø=a-Øu (読んだ) 図書館」のように描写できる。

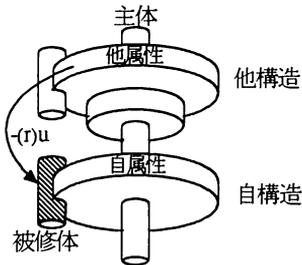
A16.5 <20> 他属性による修飾(1)……自属性による修飾のない場合

次に、他属性による修飾が行われる場合を考える。ここでは自属性による修飾のない場合を扱う。

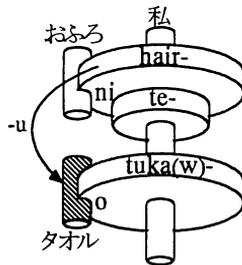
- ① <21> 同一主体構造
- ② <22> 異主体構造
- ③ <23> 同一実体共有構造
- ④ <24> 使役構造

A16.5 <21-1> 同一主体構造 (自属性による修飾のない場合①)

図A16-26 のような構造がある場合、他属性による修飾(矢印)が行われ、自属性による修飾が行われないことがある。ここではこのような場合を扱う。

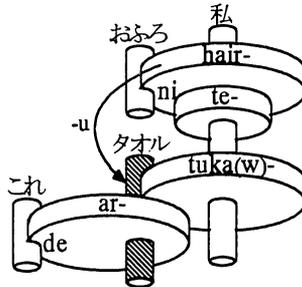


図A16-26 同一主体で単位構造が2つ



図A16-27 お風呂に入るタオル

例えば図A16-27は「お風呂に入って、タオルを使う」という構造であるが、「タオル」を被修体とするとき、「お風呂に入る」という他構造の修飾を受けて、「お風呂に入るタオル」という描写がなされる。そして例えば「お風呂に入るタオルはこれだ」(図A16-28)というような場合、自属性「使う」による修飾は行われないことになる。



図A16-28 お風呂に入るタオルはこれだ

ここでは自構造(タオルを使う)と他構造(お風呂に入る)という2つの構造が関わることになるので、修飾に関わる両構造間に時相の関係が発生する。そこで、ここで修飾関係構造群内のテンスの問題について整理をしておきたい^{*1}。(両構造を単に出来事として扱うのでアスペクトには触れない。)

A16.5 <21-2> テンスの問題

A16-7) たばこを買ったおつり

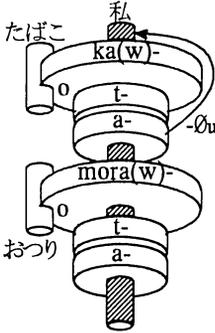
という、より適切な形式で考えたい。ここには「たばこを買う」という出来事と「おつりをもらう」という2つの出来事が想定できる。主体が同一で、仮に過去のこととして考えれば、図A16-29のような構造になる。基本的に

A16-8) たばこを買った私₀はおつりをもらった。

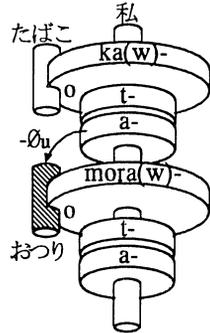
のように描写できる。この描写法は<11>に属するものである。このとき「私

*1 もちろん<10>「自属性による修飾」においても時相の関係はあるが、それは修飾構造と主構造の間の時相の関係であって、AV部で扱う性質のものである。例えば「花火を作った人(修飾構造)<11>が、ここで話す(主構造)。」のような関係である。

がたばこを買った」が修飾構造で、「おつりをもらった」が主構造である。



<11>

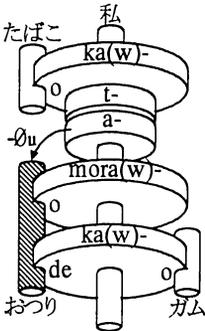


図A16-29 たばこを買った私はおつりをもらった 図A16-30 たばこを買ったおつり

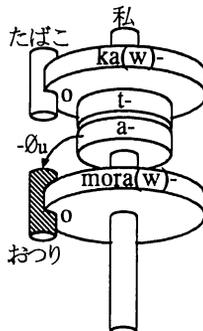
この<21>節で扱うのは、構造関係は同じでも、図A16-30 のような修飾関係である。被修体(おつり)が他属性による修飾を受け、自属性による修飾を受けない関係である。

図A16-30 では「もらう」が過去の出来事となっているが、「たばこを買ったおつり」という描写形式は、次のように「もらう」が未来を示す構造から描写されている可能性もある。

A16-9) (あすは)たばこを買ったおつり[でガムを買う。] (図A16-31)



図A16-31
未来



図A16-32
未来

「もらう」にタがつかなければ構造は図A16-31、-32のようになる。

ここで、「たばこを買う」を「買った」の形式に固定し、「おつりをもらう」を「もらった」と「もらう」の両形式で考えることにすれば、テンスの関係は①~④のようになる。記号Tはテンスを意味している。(テンスの表

示は A13章で示したテンス表示法を使用し、「たばこをka(w)-」を [1] で表示し、「おつりをmora(w)-」を [1'] で表示する。「おつりをmora(w)-」が [2] でないのは主文でないからである。)

①絶対T たばこを買った[1]おつり(をもらった[1']).) (図①)

②相対T たばこを買った[1]おつり(をもらった[1']).) (図②)

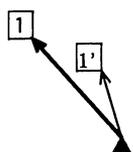
①②ともにすべて過去の出来事で、おつりももらってある。

③絶対T たばこを買った[1]おつり(をもらう[1']).) (図③)

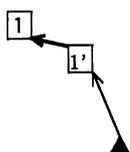
たばこはもう買ったが、おつりはこれからもらう。(相対Tも可)

④相対T たばこを買った[1]おつり(をもらう[1']).) (図④)

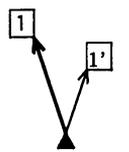
④では、たばこをこれから買う。おつりはその後でもらう。



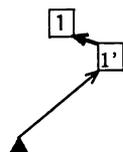
図①絶対T



図②相対T



図③絶対T



図④相対T

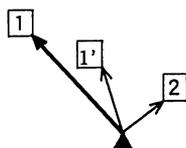
同じ「たばこを買ったおつり」でも、「買った」が絶対テンス・相対テンスのいずれの可能性もあるので、このように4通りのテンス関係がありうる。事実関係としては、①②を同一のものとして扱えば、3通りのものがある。

このようなテンス関係が修飾属性と被修体の間に厳として存在する。

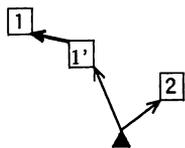
次に、これに主構造「(おつりで)ガムを買う」[2]を加えた

⑤~⑧ たばこを買った[1]おつり[1']でガムを買う[2]。

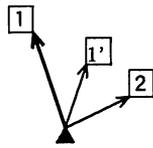
を図示すれば、図⑤~図⑧のようになる(図A16-31は図⑦、⑧の構造)。



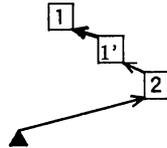
(図①→)図⑤



(図②→)図⑥



(図③→)図⑦



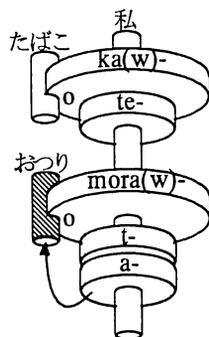
(図④→)図⑧

図⑤、⑥では、すでにたばこを買っておつりをもらってあり、これからガム

を買う。図⑦では $\boxed{1}$ と $\boxed{1'}$ は相対Tも可。図⑧では、すべてがこれからの出来事となる。

ちなみに

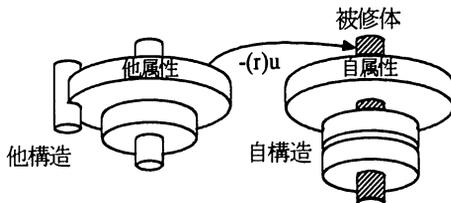
A16-10> たばこを買って、もらったおつり
 のような句の構造は図A16-33のようにになっている
 (修飾構造群)。しかしこれは自属性による修飾で、
 <12>に属するものである。この「もらった」のタが
 絶対テンスであるか相対テンスであるかは、「おつり」
 がどのような被修構造の構成要素となるかにかか
 っている。A V部で扱うことがらである。



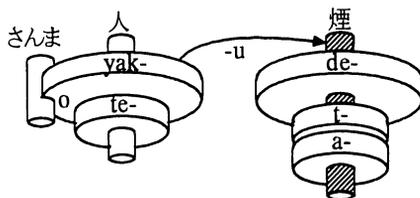
図A16-33 たばこを買って、
 もらったおつり <12>

A16.5 <22> 異主体構造 (自属性による修飾のない場合②)

図A16-34 のような構造の場合、被修体は主体の異なる他構造の属性から修飾を受けている。



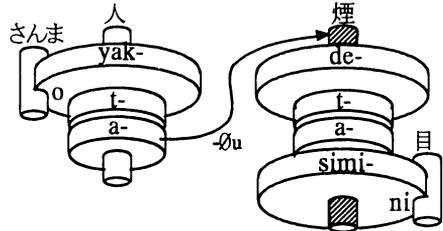
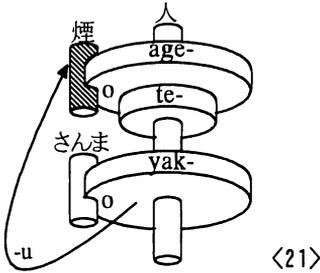
図A16-34 異主体構造が2つ



図A16-35 さんまを焼く煙

例えば図A16-35 の構造は「さんまを焼いて、煙が出た」という構造であるが、ここで「煙」を被修体とすれば、「さんまを焼く煙」という形式が描写できる。<22>に属するのはこのような形式のものである。

なお、図A16-36 からも「さんまを焼く煙」が描写されるが、これは同一主体構造であるので〈21〉に属するものである。「さんまを焼く煙」という同じ表層形式であっても、構造は一通りではなく、いくつかの可能性はある。



図A16-36 さんまを焼く煙

図A16-37 さんまを焼いた煙が目にしみる

「焼く煙」を「焼いた煙」にして、図A16-37 の構造を作り、これを

A16-11〉 さんまを焼いた煙が目にしみる。

と描写すれば、「煙が目にしみる」が主構造となる。「焼いた」のタは絶対テンス、相対テンスのいずれでもありうる。

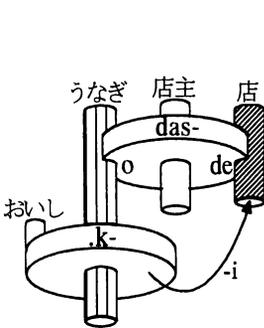
もし、図A16-37 の構造から「目にしみるさんまを焼いた煙」という描写をすれば、被修体を自属性でも修飾したことになり、〈31〉で扱う多重修飾の形式となる。

A16.5 〈23〉 同一実体共有構造 (自属性による修飾のない場合③)

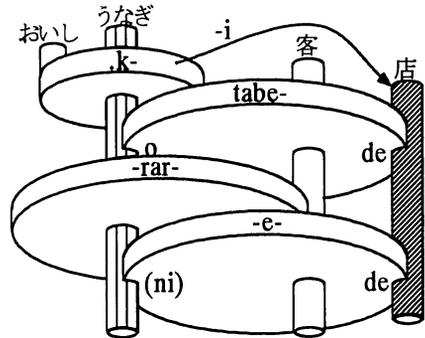
〈21〉の同一主体構造も同一実体共有構造の一種であるが、ここではそれ以外のもの、つまり、同一実体が〈主体、客体〉である場合と〈客体、主体〉及び〈客体、客体〉である場合を扱う。(ちなみに、〈21〉は同一実体が〈主体、主体〉の場合である。)

図A16-38 の構造は「店」を被修体とするとき、「店主が店でうなぎを出す(自構造)」という単位構造と「うなぎがおいしい(他構造)」という単位構造の2つの単位構造から成立している。この構造の特徴は「うなぎ」という実体を両単位構造が共有していることである(一方では客体として、一方で

は主体として)。このとき、「うなぎがおいしい店」と描写すれば、他属性による修飾となる。(共有される同一実体は図示において図中の「うなぎ」のように、縦の縞模様で表示する。)



図A16-38 うなぎがおいしい店



図A16-39 うなぎがおいしい店

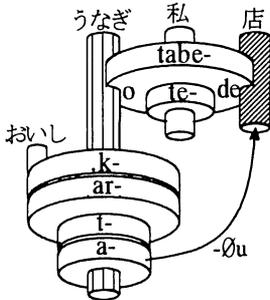
また、図A16-39の構造でも「店」を被修体とするとき、「客が店でうなぎを食べる(自構造)」という単位構造と「うなぎがおいしい(他構造)」という単位構造の2つの単位構造から成立しており、「うなぎ」が共有の実体となっている(主体、客体として)。このとき「うなぎがおいしい店」と描写すれば、他属性による修飾となる。

この2つの構造で、もし「おいしいうなぎを出す店」「おいしいうなぎを食べられる店」と描写したとすれば、それは<11>+<12>の被修連鎖(A16.3 ㊦)であり、特にここの<23>の修飾関係であるわけではない。修飾構造①・被修構造①=修飾構造②の存在する構造となる。

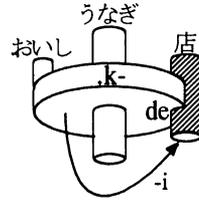
「うなぎがおいしかった店」では、図A16-40のような構造が考えられる。

なお、以上において「(この)店ではうなぎがおいしい」という単純な単位構造を設定することもできる(図A16-41)。その場合には「うなぎがおいしい店」は<12>の自属性が客体を修飾する形となる。

図A16-42は「(暮れに)大掃除が済んだ正月」の構造を示している。実体「暮れ」を共有しており、被修体「正月」が他属性「済んだ」の修飾を受け、<23>の修飾関係となる。

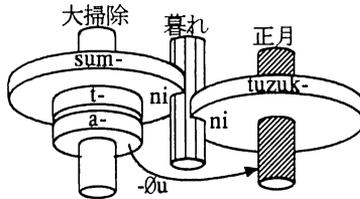


図A16-40 うなぎがおいしかった店



図A16-41 うなぎがおいしい店

<12>



図A16-42 大掃除が済んだ正月

この構造でも、もし「暮れ」を被修体1, 「正月」を被修体2として描写したとすれば, 「大掃除の済んだ暮れに続く正月」となる。この描写法では<23>の修飾関係にならない。修飾構造①・被修構造①=修飾構造②の存在する「被修連鎖」の形式となる。

A16.5 <24> 使役構造……使役主体が修飾される

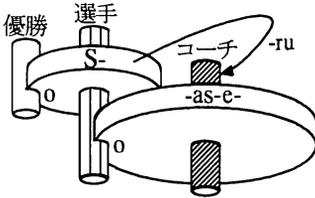
(自属性による修飾のない場合④)

図A16-43 は「コーチが選手を優勝させる」の構造で、使役構造になっている。このとき使役主体(コーチ)が被修体となり「選手が優勝するコーチ」のように描写されることがある。

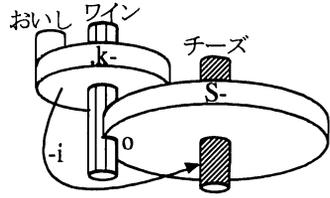
構造形式は<23>に似ているが、自属性が使役的(原因的)な要素を持っている点が異なっている。

また、図A16-44 は「(食べた)チーズがワインをおいしくする」の構造で、この構造は使役構造に類似している。この場合にも使役主体に相当する主体

(チーズ)が修飾されて「ワインがおいしいチーズ」のように描写されることがある。

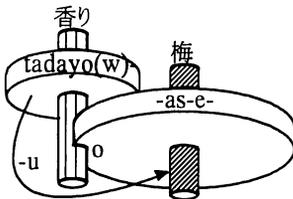


図A16-43 選手が優勝するコーチ

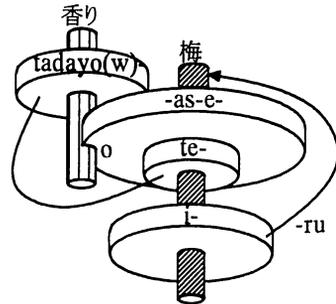


図A16-44 ワインがおいしいチーズ

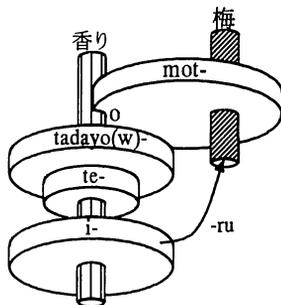
図A16-45 では「梅が香りを漂わせる」という構造から「香りが漂う梅」が描写される。



図A16-45 香りが漂う梅



図A16-46 香りが漂っている梅



<23>

図A16-47 香りが漂っている梅

もし図A16-46 の「梅が香りを漂わせている」という構造から「香りが漂っている梅」が描写されるものと考えるときは、「漂っている」のテイルは被修体(梅)の属性である。このように時相表現は被修体のものを借用する場合もあることが考えられる。

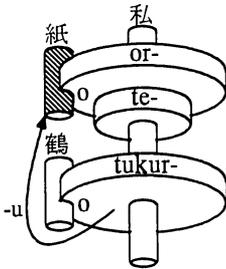
ただし、「香りが漂っている梅」は 図A16-47 のような構造から描写されたものであると考えることもできる。これは使役構造ではなく、「香り」を共有実体とする <23> の形式であり、他属性による修飾となる。

A16.5 <30> 他属性による修飾(2)……自属性による修飾もある場合

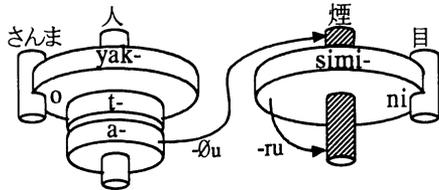
他属性による修飾が行われ、自属性による修飾のない場合を<21>～<24>で見してきた。ここでは自属性による修飾もある場合を扱う。

A16.5 <31> 修飾構造群による修飾

図A16-48 では「紙」が被修体であるので、「紙を折って」が自構造であり、「鶴を作る」が他構造である。この構造を「折って鶴を作る紙」と描写する場合、他構造「鶴を作る」が「紙」を修飾することになるが、自属性「折って」も修飾に参加している。つまり、被修体(紙)は、間接的に自属性による修飾も受けていることになる。この場合、2つの単位構造は修飾構造群を形成している。



図A16-48 折って鶴を作る紙



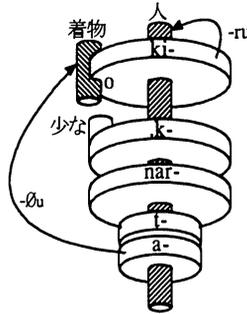
図A16-49 さんまを焼いた目にしみる煙

図A16-49 では「煙」を被修体とすると、「目にしみる」が自構造、「人がさんまを焼いた」が他構造である。このとき「目にしみるさんまを焼いた煙」と描写すると、被修体「煙」が自属性と他属性の両方から修飾を受けたことになる。多重修飾(A16.3①)を受けたわけで、この場合も2つの単位構造は修飾構造群を形成している。

以上のように、自属性による修飾もある場合は、修飾構造は群となる。

A16.5 <32> 被修構造によるもどり修飾

図A16-50の構造は、「人」を被修体とすれば、基本的に「着物を着る人が少なくなった」と描写できる構造であり、このように描写するとき「人が着物を着る」が修飾構造で、「人が少なくなった」が被修構造(主構造)となる。



図A16-50 着る人が少なくなった着物

この構造において、「着物」を被修体2とすれば、「着る人が少なくなった着物」と描写することができる。被修体1の「人」からみれば「人が少なくなった」は被修構造①であるが、この被修構造内の属性「少なくなった」が修飾構造①内の実体「着物」を修飾したことになる。「もどり修飾」と定義した(A16.3①)現象がここに生じている。このとき、被修体2である「着物」の自属性「着る」も間接的にはあるが、修飾に参加している。

ここで、被修構造①「人が少なくなった」は同時に修飾構造②である。そのように被修の連鎖としてとらえることもできるが、もどり修飾の生じる場合は、修飾構造①(人が着物を着る)が被修構造②(人が着物を着る)でもある形式であるととらえることもできる。

A16.5 <40> 包含実体が修飾される場合(1)……機能的包含実体

A16.5 <41> 機能的包含実体

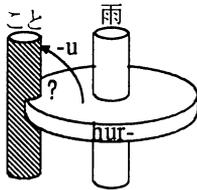
前の節までに見てきたのは被修体が自属性ないし他属性によって修飾される場合であった。その場合、被修体は ①自属性に対しては何らかの格で関わっていて、②他属性に対しては（自構造が他構造と論理的関係を保つことから）何らかの論理的関係にある、ということになっていた。

ところが、被修体「こと」の場合、例えば

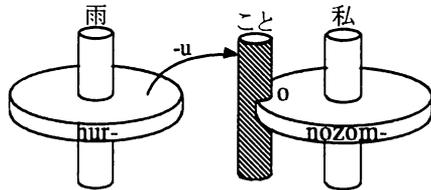
A16-12> 雨が降ること

のような場合、①「雨」は自属性「降る」に対して主格で関わっているが、「こと」が属性「降る」に「格」で関わっていることは考えられない。

「*雨がことが降る」「*雨がことを降る」「*雨がことに降る」「*雨がことから降る」等、どんな格詞も入れることができない(図A16-51)。



図A16-51 「こと」は何格？



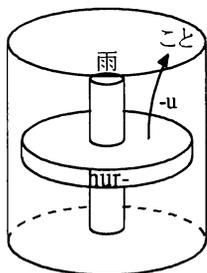
図A16-52 他構造・自構造？

では、② 他構造の他属性との論理的関係として考えられるのであろうか。例えば、図A16-52 のような自構造と他構造があったとする。自構造は基本的に「私₀ことを望む」と描写できる。しかし、これと他構造である「雨が降る」と何らかの論理的関係があるだろうか。「こと」そのものが内容を持たないのだから、論理的関係など考えようがない。

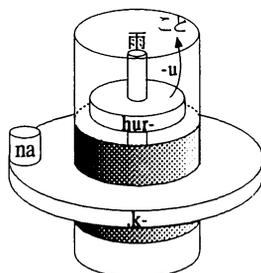
そこで、「こと」を別の形の被修体として扱うことになる。「雨が降ること」では「雨が降る」出来事を①②のいずれにもよらずに名詞化(実体化)しているのであるから、その構造そのものを実体の円柱の中に入れてしまうことにする。図A16-53 のようになる。『文法』ではこの実体を「包含実体」と名付けている(『文法』6.3~6.7)。

包含実体中の構造を「副構造」と呼ぶ(『文法』6.3, 6.5)ので、副構造の属性(副構造属性)が包含実体を修飾することになる。

ちなみに、図A16-54は「雨が降ることはない」の構造である(『文法』35.4)。



図A16-53 雨が降ること

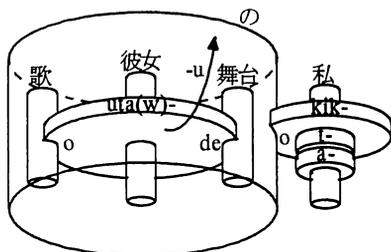


図A16-54 雨が降ることはない

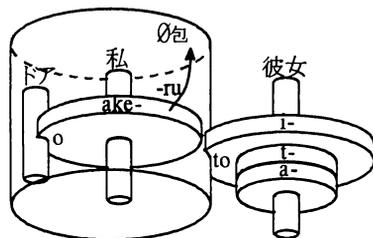
「こと」は「理由」「つもり」「まで」のような意味を持つ包含実体とは異なっていて、文を単に実体化(名詞化)するだけである。いわば「機能的包含実体」である。このようなものとしては、ほかに「の」(『文法』36.8)と「 \emptyset 包」(『文法』6.6)がある。

A16-13> 私は彼女が舞台上で歌を歌うのを聞いた。(図A16-55)
は「の」の用例であり、次は「 \emptyset 包」の用例である。

A16-14> 私がドアを開ける \emptyset 包と*1, 彼女がいた。(図A16-56)



図A16-55 機能包含実体「の」



図A16-56 機能包含実体「 \emptyset 包」

*1 この「と」は表層文法では接続助詞であるが、構造の上では格として機能している。『日本語文法大辞典』には「後件の条件を示すといった働きをしたりする格助詞『と』から転成したものと捉えるのが一般である。」とある。『古典語現代語 助詞助動詞詳説』にも「格助詞『と』から派生した」とある。本文法では「条件基」。

「 \emptyset 包」は「 \emptyset 」と書いてもよい。

「 \emptyset 包」と「の」の使用の関係については『文法』36.9参照。

「の」と「こと」の使用の関係については簡潔な規則の記述が望まれる。

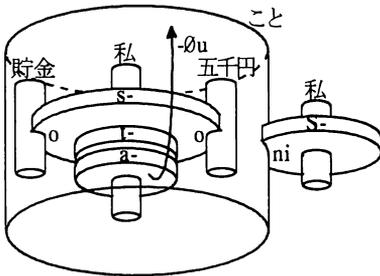
A16.5 <42> 機能的包含実体の関わる基

機能的包含実体(こと, の, \emptyset 包)は基を形成することが多い。ここには一例を挙げるにとどめる。

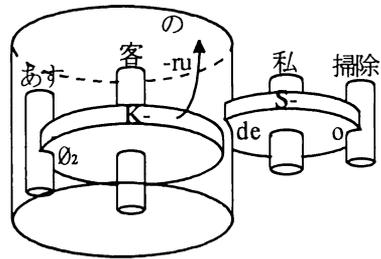
A16-15> 私は五千元貯金したことにする。 (図A16-57)

A16-16> あす客が来るので掃除をする。 (図A16-58)

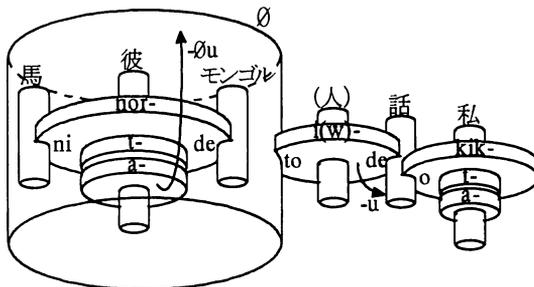
A16-17> 彼がモンゴルで馬に乗った \emptyset 包という話を聞いた。 (図A16-59)



図A16-57 ~たことにする



図A16-58 ~ので



図A16-59 ~という話

A16.5 <50> 包含実体が修飾される場合(2)……意味的包含実体

A16.5 <51> 意味的包含実体

<40>で扱った包含実体がほとんど意味を持たないと対照的に、ここで扱う包含実体は意味を持っている。「理由」「話」「まえ」「まで」などは文を単に実体化するだけでなく、それぞれに意味を持たせた実体化を行う。(意味的包含実体には、ほかに「ところ・もの・わけ・ため・つもり・とき・あと・はず・らし・よう・結果・ほう」等々がある。)

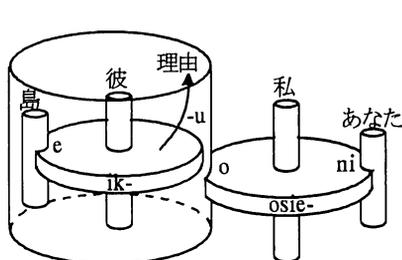
A16-18> 彼が島へ行く理由をあなたに教える。 (図A16-60)

A16-19> 彼がモンゴルで馬に乗った話を聞いた。 (図A16-61)

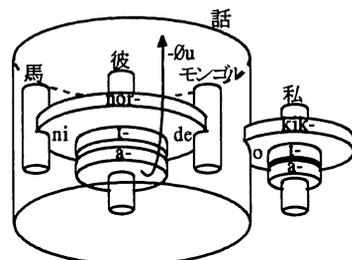
A16-20> 彼が歌を歌うまえに彼女が話す。 (A10章)(図A16-62)

A16-21> 彼は結婚するまでに正社員になる。 (図A16-63)

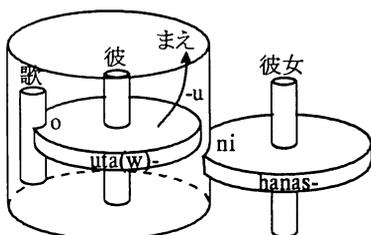
「まえ・まで」はアスペクト補完実体(A10章)として機能する。



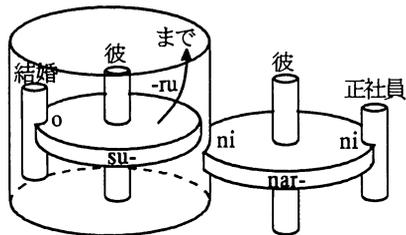
図A16-60 ~する理由



図A16-61 ~た話



図A16-62 ~するまえに



図A16-63 ~するまでに

なお、「人は結婚するまで独身だ。」という文の場合、包含実体「まで」は属性「(独身-d=a(r)-」の θ_2 格にあるものと考えられる(図A16-63参考)。

A16.5 <60> 基準点と関係のある修飾……ヨリ格の関わる構造

A16-22> 学校がある東側に公園がある。

という文は二義的で、解釈は2通りある。

- ① 学校と公園は(例えば図書館の)東側にある。
- ② 学校の東側に公園がある。

この2つの解釈はなぜ生じるのだろうか。

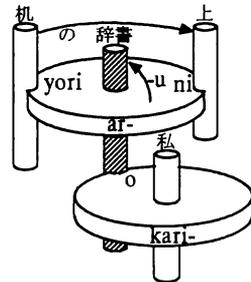
この問題について考える前に、まずヨリ格の構造について考えておきたい。

A16.5 <60-1> ヨリ格の構造

A16-23> 机の上にある辞書を借りる。

という文の構造は図A16-64 のようなものとして考えられる。ここでは「机の上にある」という自属性(自構造)が主体(辞書)を修飾している(<11>)。

ここで留意したいことは「上」という相対的な位置を表す実体の扱い方である。「机の上」というとき、「机」には「の」が付いている。『文法』36.2 で述べたように「の」があるときに構造を知るには、「の」の前の実体(名詞)が何格にあるのかを明らかにしなければならない。



図A16-64 机の上にある辞書

「机の上」で、格を明示して考えられるのは「机ヨリの上」という形である。「机」は「ヨリ格」に立っているものと考えられる。そこで図A16-64 のような構造図示になるわけである。

これは「上」の場合だけでなく、「下」でも同様であり、「前・後ろ／右・左／東・西・南・北／中・外」の場合も同じで、いずれも実体(名詞)は「ヨリ格」にあると考えられる。

ただし、「中」の場合は「堀ヨリの中」では同様であるといえるが、「箱の中」のような場合は「箱ヨリの中」とは考えにくい。これは通常の言語使用感覚ではなじみがないということだけで、論理関係ではこの通りである、

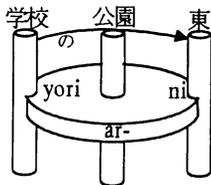
ということなのかもしれないが、これは「箱ニある中」という意味で「箱ニの中」と考えてよいかもしれない。「箱ガ持つ中」という意味で「箱ガの中」の可能性もある。……このことは、場合によっては相対的な位置を表す他の実体にも考えられることであるかもしれない。

ヨリ(比較の基準)格の定義

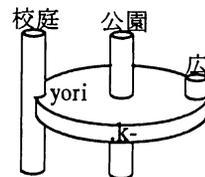
本文法では、ヨリの持つ「比較の基準」格を次のように定義する。

「主体が(ヨリ格にある)基準実体とは異なる様態(程度増を含む)でその属性を持つ」という論理関係を示す格。

例えば、「公園は学校の東にある」という表層文の構造は図A16-65 のとおりであり、実体「学校」が属性 ar- のヨリ格にあり、基準実体となる。このとき定義に従って、「主体『公園』は、基準実体『学校』と、異なる様態『東に』で、その属性『ar-』を持つ」ということになる。



図A16-65 公園は学校の東にある



図A16-66 公園は校庭より広い

ちなみにいえば、「公園は校庭より広い」という形容詞文の構造は図A16-66 のとおりであり、この場合は「主体『公園』は、基準実体『校庭』と、異なる様態『程度増』で、その属性『hiro.k-(広い)』を持つ」ということになる。

A16.5 <60-2> ヨリ格構造の描写

ヨリ格構造では、「基準実体」を先に、「異なる様態を示す部分」を後に描写しなければならない。例えば、図A16-65 では「学校ヨリ東に(ある)」

「学校の東に(ある)」のように描写する。この順序を逆にして「東に学校ヨリ(ある)」とか「東の学校より(ある)」とかとすることはできない。

図A16-66 では「校庭ヨリ広い」となる。形容実体(広)は実体としては独立しにくいので「基準実体」から出る実体つなぎ矢印「の」で結ぶことはできない。つまり、「校庭の広」とすることはできない^{*1}。

場合によってはヨリ格にある(基準)実体を描写せずに「ヨリ東にある」「ヨリ広い」とすることが可能である^{*2}。(これはヨリ格においてのみ可能なことである。例えば、「筆で文字を書く」を「で文字を書く」とか、「ここからあそこまで走る」を「からあそこまで走る」とかのようにすることはできない。)

A16.5 <60-3> 暗黙の基準点のある構造での修飾

A16-24> 学校がある東側に公園がある。

という文が二義的であることはすでに述べた(<60>冒頭部)。

① 学校と公園は(例えば図書館の)東側にある。

② 学校の東側に公園がある。(学校が西に、公園が東にある。)

ここには、文面に表れていない暗黙の基準点の存在が考えられる。基準点のありかと、被修体「東側」の修飾様式の違いによって、①と②の区別が生じるものと考えられる。①を<61>で、②を<62>で扱う。

基準点を記号Ⓧで表示することにする。

*1 「校庭の広」という形式は、例えば、「校庭の広い学校」という句の中にあるが、この表層形式はまったく異なる構造、つまり、「学校は校庭が広い」という、構造単位が属性となる複主体構造から描写されるものである。このとき「の」で結ばれているのは「校庭」と「学校」である。(『文法』19.3 [特徴3]参照)

*2 『岩波国語辞典』によれば、ヨリのこの用法は「散文の比較級の訳語として生じた」という。

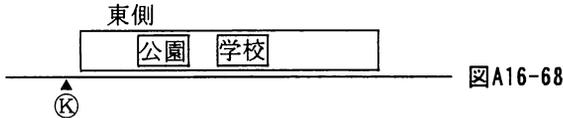
A16.5 <61> ①両者が被修体(東側)の示す位置にある場合

……学校と公園が同じ東側にある場合

まず①の解釈では、学校と公園の両者が被修体「東側」の表す位置にある。この場合、両者は(例えば「図書館」のような)暗黙の基準点Ⓚより東側にある(図A16-67、-68)。公園が学校の東にあるか西にあるか、さらに北にあるか、南にあるかは関心外である。



図A16-67

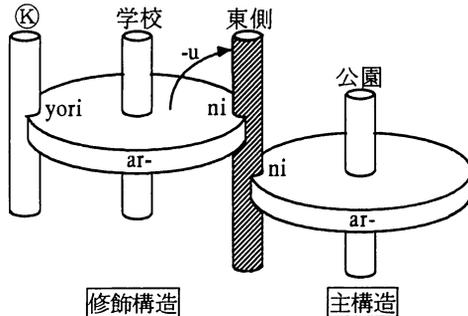


図A16-68

学校がある東側に公園がある

このときの構造は図A16-69 のようになっている。「学校が㊀より東側にある」が修飾構造で、「学校がある東側」と描写される場合、自属性 ar- が客体「東側」を修飾する<12>のパターンであり、「東側に公園がある」が主構造である。構造の持つ意味からは「学校・公園」のいずれもが「東側」にあることになる。

このような構造から①の「学校がある東側に公園がある」が描写されている。



図A16-69 学校がある東側に公園がある

A16.5 <62> ②主文主体が被修体(東側)の示す位置にある場合

……学校の東側に公園がある場合

次に②の解釈では、公園が被修体「東側」の表す位置にある。この場合は学校が暗黙の基準点Ⓚである。

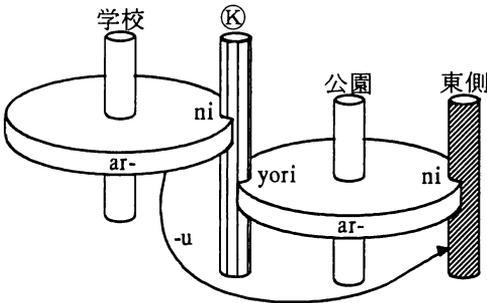


図A16-70 学校がある東側に公園がある

構造は図A16-71 のようになっている。「学校は基準点にあり」「公園はその基準点より東側にある」というのが構造意味である。

属性「(学校がある)」で被修体「東側」を修飾すれば、同一共有実体を持つ他属性による修飾で、<23>の形式であることになる。共有実体になっているのは基準点Ⓚである。

この修飾様式から②「学校がある東側に公園がある」が描写できる。



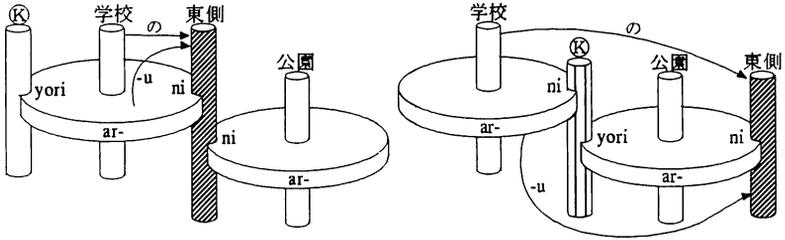
図A16-71 学校がある東側に公園がある

以上により、A16-24> の文が二義的であることは、暗黙の基準点Ⓚを持つ構造のあり方と、その修飾の様式に原因があることが明らかになった。

なお、また、いずれの構造からも「の」を用いた

A16-25> 学校[Ⓚ]のある東側に公園がある。

が描写できるが、これを図示すれば図A16-72、図A16-73 のようになる。



図A16-72 学校 **の** ある東側に公園がある 図A16-73

ただし、属性「ある」を描写しないで

A16-26> 学校の東側に公園がある。

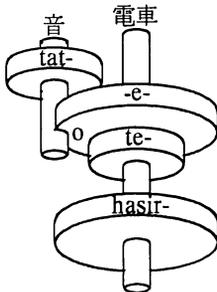
と描写する場合は、より単純な構造である図A16-65 と同様の構造の描写されたものとしての解釈が優先する。

A16.6 「電車の走る音」と「走る電車の音」

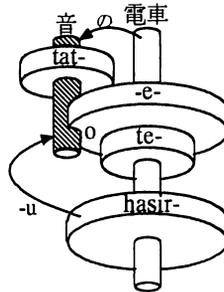
A16-27> 電車が音を立てて走る。

という構造(図A16-74)があるとき、この構造から次の2つの表層形式が描写できる。この2つは意味的に同じものといえそうだが、何かが違うようにも思える。これはどう考えればいいのだろうか。

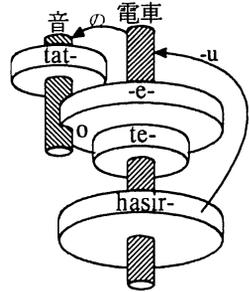
- a 1) 電車の走る音 (図A16-75)
- b 1) 走る電車の音 (図A16-76)



図A16-74
電車が音を立てて走る



図A16-75
a 1) 電車の走る音



図A16-76
b 1) 走る電車の音

この2つの形式は、「電車」と「音」が「の」で結ばれる点で同じであり、「走る」が a1)では「音」を修飾し、b1)では「電車」を修飾するという点で異なっている。意味的には同じもののように思われる。この種のもは a1)でも b1)でも同じといえるのだろうか。

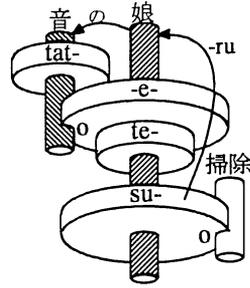
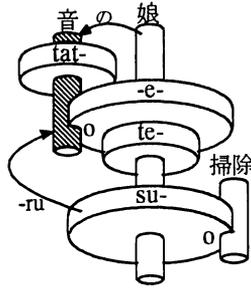
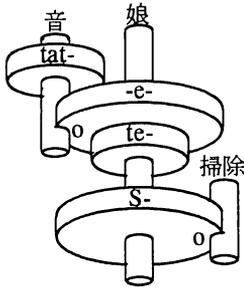
この問題を考えるのに、次のような類似の別の例で検討してみたい。

A16-28> 娘が音を立てて掃除をする。

この文の構造(図A16-77)からは次の2つの表層形式が描写できる。

a2) 娘の掃除をする音 (図A16-78)

b2) 掃除をする娘の音 (図A16-79)



図A16-77

図A16-78

図A16-79

娘が音を立てて掃除をする a2) 娘の掃除をする音 b2) 掃除をする娘の音

やはり、この2つの形式は、「娘」と「音」が「の」で結ばれる点で同じであり、「掃除をする」が a2)では「音」を修飾し、b2)では「娘」を修飾しているという点で異なっている。

a系の描写「電車の走る音」「娘の掃除をする音」では「出来事としての音」であるが、b系の描写「走る電車の音」「掃除をする娘の音」では「主体の発する音」としての側面が前面に出てくる。

a系……電車の走る音、娘の掃除をする音……出来事としての音

b系……走る電車の音、掃除をする娘の音……主体の発する音

構造描写の段階ではいずれの描写も可能であるが、自然さの点ではどうだろうか。b系描写の「娘の音」は「電車の音」ほどに自然であるわけではない。「電車の音」といっただけでも「電車の走る音」ととらえられるが、

「娘の音」といっただけではどんな音がすぐには分からない。この両者は自然さにおいて異なっている。理解のしやすさにおいて異なっている。

b系の描写では、その主体と音の関係が常識的に限定的なものであるかどうかは自然さ(理解のしやすさ)と関係している^{*1}。

つまり、こういうことがいえるだろう。

a 1) 電車の走る音 (図A16-75) (出来事のイメージ)

b 1) 走る電車の音 (図A16-76) (主体のイメージ)

両形式は同一の構造から描写できるので、構造意味としては同一であるといえる。ただし、表層化する際に「音」を何と関連づけるかという話者の意図・意識のありかたが反映し、ニュアンスのちがいが発生する。それは出来事のイメージとしてとらえるか、主体のイメージとしてとらえるか、の違いといえる。実体(音)は「出来事のイメージ」でとらえて修飾した方が限定度が高く、理解しやすいことになる。

「主体のイメージ」としてとらえる場合は、意味的限定度の問題がある。

bの「～の音」の部分の意味がaの意味にどれほど限定されているかが重要な要素となる。「電車の音」といえば、常識的には「電車の走る音」であるから、「電車の音」はa1の意味における限定度が非常に高い。したがって、b1は自然な表現であるということになる。これに対して

a 2) 娘の掃除をする音 (図A16-78) (出来事のイメージ)

b 2) 掃除をする娘の音 (図A16-79) (主体のイメージ)

の場合、「娘の音」の「掃除をする音」への常識的な限定度は低い。このため、b2は十分自然な表現とはならない。

以上、a系(電車の走る音)、b系(走る電車の音)の比較から、構造意味は同じでも、その構造の構成実体によって、また、描写のしかたによって、自然さの異なること、理解のしやすさの異なることがあることが分かった。

*1 b系の描写で、その主体と音の関係が限定的なものでなくても、「掃除をする娘の立てる音」のように出来事を補って、出来事としての音にすれば、つまりa系に変えれば、自然になる。

A16.7 から格・まで格・と(共同者)格の場合

自属性に対して格関係にある実体は自属性による修飾を受けることができるが、「から格・まで格」および共同者を表す「と格」にある実体は「付加的な情報」がないと意味の不明瞭な修飾関係になってしまうことが多い。

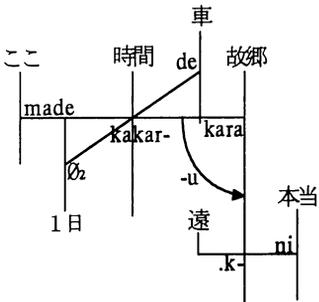
「から格・まで格・と(共同者)格」にある実体での修飾状況について検討しておきたい。(ここでは自属性が動属性である場合を考える。)

1) から格

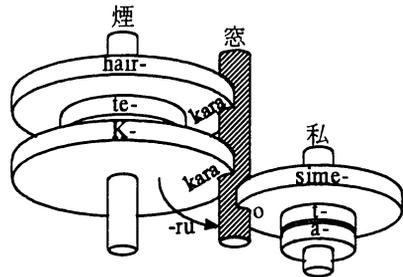
A16-29> ここまでで車で1日かかる 故郷 は本当に遠い。

という例文がある。構造は図A16-80 のようになっている。この構造において、被修体「故郷」は「(時間が1日)かかる」という属性に対して「から格」に立っている。

ここにある「1日かかる故郷」という形式の意味は、普通は「故郷へ行くのに1日かかる」ということで、方向が逆になってしまう。これは、「故郷」が構造において「から格」にあると解釈される以前に「へ格・に格」にあるとの解釈が優先してしまうためである。方向を示す格では「から格」の認知順位は「へ格・に格」より低いわけである。



図A16-80 1日かかる故郷



図A16-81 煙が入ってくる窓

そこで、「ここまで」のような情報を付加することによって「故郷」が「から格」に立っていることを明確にする必要がある。「ここまで1日かかる故郷」としてはじめて構造描写が成功することになる。

別の例

A16-30> 煙が入ってくる 窓 を閉めた。

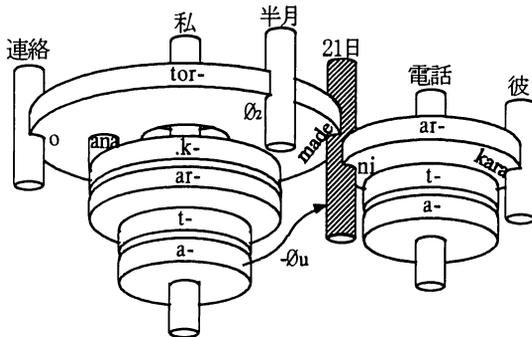
ではどうだろうか。この文の構造は 図A16-81 のようになっている。「窓」は「入ってくる」に対して「から格」に立っているが、修飾して「(煙)入ってくる窓」としても意味は一義的で明瞭である。これは属性「入ってくる」に対して「窓」が通過点(通常「から格」で表示)であるという関係が明瞭であるからである。この場合には特に付加的な情報はいらぬ。「窓」が「となりの部屋」である場合には「(煙)入ってくるとなりの部屋」となり、「となりの部屋」は「から格」でなく「に格」での解釈が優先してしまう。)。

2) まで格

A16-31> 半月連絡をとらなかつた 21日 に彼から電話があった。

という例文の構造は 図A16-82 のようになっている。この構造を単に「連絡をとらなかつた21日」という修飾関係だけで描写すると、「21日に連絡をとらなかつた」という意味が優先する。それは、時を表す格では「に格」のほうが「まで格」より認知の順位が高いからである。

そこで、「半月」という期間を表す実体を付加的情報として描写することになる。「半月連絡をとらなかつた21日」とすることで、「21日」が「まで格」にあることが明瞭になる。

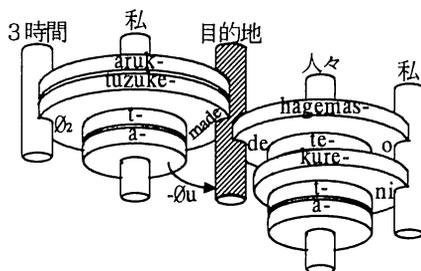


図A16-82 半月連絡をとらなかつた21日に彼から電話があった

別の例

A16-32> 3時間歩き続けた 目的地 では人々が励ましてくれた。

の構造は 図A16-83 のようになっている。実体「目的地」は「まで格」にあるが、属性が「歩き続けた」という継続を表すものになっているので、「まで格」であることが容易に認識できる。それで、ここでは(「3時間」のような)付加的な情報はなくてもよい。(「歩いた」だけの場合は必要。)

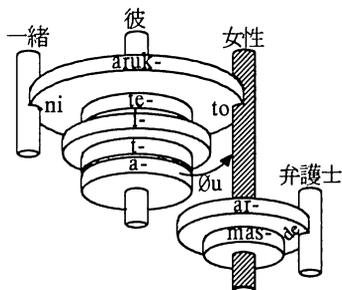


図A16-83 3時間歩き続けた目的地では人々が励ましてくれた

3) と(共同者)格

A16-33> 彼と一緒に歩いていた 女性 は弁護士です。

の構造は 図A16-84 のようになっている。「彼が歩いていた」を「女性」に修飾させて「彼が歩いていた女性」としただけでは論理関係が不明である。共同者格は属性にとって、適用が任意の格だからである。



図A16-84 彼と一緒に歩いていた女性は弁護士です

この場合、共同者格であることを「一緒に」のような付加情報によって示し、「彼と一緒に歩いていた女性」とすることによって正確な伝達が可能となる。

A16.8 内の関係, 外の関係

連体修飾といえば寺村(1981)の「内の関係・外の関係」という有用な概念があるが、本章では一応そのような概念を離れて、一から組み立ててみた。〈11〉, 〈12〉, 〈61〉等が内の関係にあるもののように思われるが、今後改めて整理をしてみたい。

※この章の内容については、吉川武時先生(東京外国語大学名誉教授)の八王子・日本語文法研究会における講演「連体修飾構造の問題点」(2001年11月)の内容とその後の討議に示唆を与えられた部分が多い。記して感謝申しあげる。

- 構造が形として保たれるためには6つの力が必要? → p. 242
若さ・甘み・暑げ・言いたげ……どうモデル化? → p. 247
基が形成されるためには7つの力と慣用力が必要? → p. 249
みかけの一語「立つ瀬・ほのお・登山」等の構造は? → p. 249
多義文はどのような構造/描写から生まれる? → p. 259
「みたいだ」は「ようだ」の構造から生まれた? → p. 271